

沼津市若山牧水記念館

第76号 令和8年3月15日 編集・発行 公益社団法人 沼津牧水会 TEL・FAX 055-962-0424
〒410-0849 沼津市千本郷林1907-11 http://web.thn.jp/bokusui/



咲きさかる芍薬の花はみながらに日に向ひき けり長安寺の庭に 牧水

昭和二年五月から七月にかけて牧水は、妻喜志子を伴い朝鮮方面の揮毫旅行に出かけた。掲出の短歌は、朝鮮半島金剛山の長安寺で詠んだもので、死後出版された第十五歌集『黒松』の「金剛山内、長安寺にて」五首のうちの一。他の四首は次のとおりである。

長安寺の庭の芍薬さかりなり立ちよればきこゆ花の匂ひの

芍薬のなけば咲きたるまだ咲かぬとりどりの花にあそぶ蟻虫

美しき雀なるかな芍薬の真盛りの園の砂にあそべる長安寺梵王楼のたかどのに寝乱れたりな真昼を人は

住宅兼雑誌発行事務所を建てる資金を作るために大正十二年頃から試みていた短冊半切揮毫頒布会を、大正十三年から大々的に催すことになった牧水。昭和二年に、最後の揮毫行脚として朝鮮に出かけることを考え、準備を整え、五月四日に夫妻同伴で出発した。大阪、広島、下関、延岡、大分と立ち寄り、下関から戸畑、八幡と回り、十六日に下

京城では、ラジオ出演や揮毫講演会を行った。そして十三日、電車、乗合自動車に乗り継ぎ、金剛山にむかった。次の日、案内人につれられて長安寺、表訓寺、正陽寺、万瀑洞八潭などを見物した。単行本には未収録だが、「朝鮮紀行」に長安寺について次のように記している。

六月十四日。おもいのほかの天気であった。頼んでおいた案内人が来たので、二人とも草鞋に足を固めて発足した。――中略――程なく長安寺に着いた。伽藍はなかなか大きく、大雄殿の額を掲げた本堂のほかになお二三棟の堂宇が立ち並んでいた。寺の山門とも見るべき梵王楼というのの階上には十人あまりの僧侶だか俗人だかがいぎたなく寝乱れていた。美しいのは庭に咲いている芍薬の花であった。庭の土が殆んど真白なこまかな砂利なので、一層この花が浮き立って見えた。

その後、朝鮮半島各地を回ったが、気候風土の不慣れと疲労とで退鮮、七月十二日に下関に上陸。大分、延岡等で揮毫会を催したのち、坪谷の母の見舞い、父の墓参をし、七月三十一日に帰宅。それからも体調不良が続き、昭和三年に亡くなる一因になったのではないだろうか。

関から乗船して、その日の夜に朝鮮半島釜山に上陸した。そこから各地を巡りながら、珍島に渡り、その後北上、六月七日に京城へ着いた。

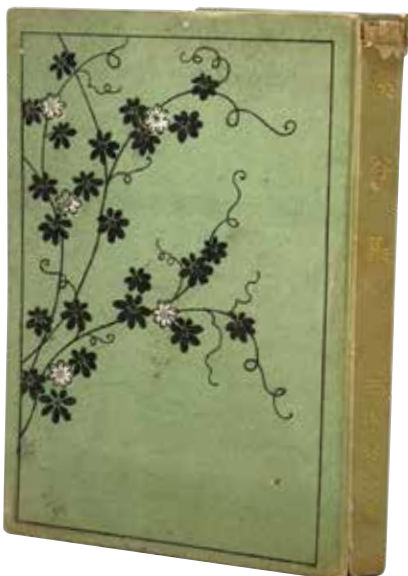
牧水の叙景 大辻隆弘



皆さん、こんにちは。大辻隆弘と申します。よろしくお願ひします。講演の題名を「牧水の叙景」とさせていただきます。名を「牧水の叙景」とさせていただきます。「叙景」って分かるでしょうか。景色を叙するということですね。牧水にもそういう歌は多いんですね。今から十数年くらい前、若山牧水的全歌集を読み直す機会がありました、そのとき『くろ土』とか『山桜の歌』あたりの歌が非常に心に沁みました。今日はそういう晩年の牧水の叙景歌の魅力みたいなものを実作に即しながらお話します。

牧水の叙景歌は『くろ土』という歌集で大きく転換を遂げるのですが、その前の『溪谷集』にもいい叙景歌があります。

石越ゆる水のまろみを眺めつ
つこころかなしも秋の溪間に
『溪谷集』
秋の日差しが明るく差している



第12歌集『溪谷集』

ときに溪谷に行った。石があり、その石を水が越えていく。その「水のまろみ」を歌った歌です。石は角があります。しかし、川の流れがあつてその流れがその上を通る。すると石を包むように水が丸く曲がります。そのまろみという細部をさつとすくい上げる。まるで自然の情景ではないかのような美しい弧を帯びた形が立ち上がってきます。そういうところを鋭く見つめている。この発見の面白さ、やっぱり魅力的だと思います。

このように上句では鋭い描写が行われていますが、それに対して、下の句はゆつたりと「こころかなしも秋の溪間に」というふうに分の心情を述べてゆく。そういうところも魅力的だと思つてですね。

ひちひちと音ねの聞えてうち上り秋のひな
たに光る早き瀬 『溪谷集』

これも非常に感覚的な歌です。水の飛沫が飛び散ってそれが谷間に打ち上がる。そういう情景を詠っていると思うのですが、この歌で面白いのは「ひちひち」っていうオノマトペです。すごい硬い感じですよ。水しぶきの光、光の輝き、光の粒子がぶつかりあっているような感じ。それが「ひちひち」なのだと思います。こういう視覚的な情報を繊細な「ひちひち」というオノマトペで硬質な美しさに変えてゆく。そこがすごいと思います。

このように『溪谷集』の叙景歌はすごく繊細で、細部を描いている歌にいいものが多いが、その繊細さが、次の『くろ土』に入ってゆくと、もっと大らかな、もっとゆったりとした感じ。それが出て来るようになります。

なだらかに大き尾引きてこの谷のくだれ
るかぎり杉ならび立てり 『くろ土』

比叡山に登った時の歌です。すごく大きなスケールの歌でしょう。「大き尾」は、大きな尾根ですね。山の頂上から見下ろすと、尾根が三つも四つも続いているはず。その尾根の間には深い谷があります。なだらかで大

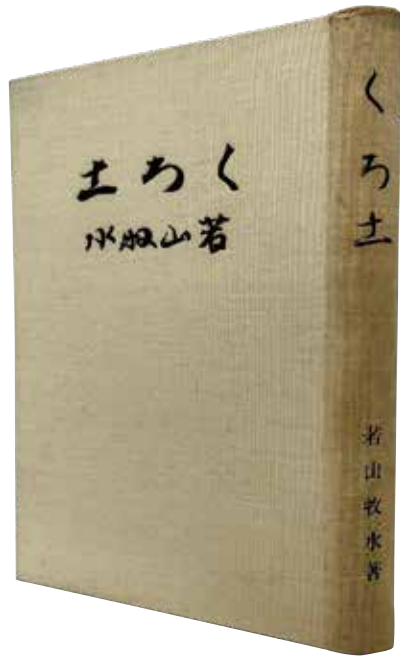
きい尾根を引いてこの谷が山裾に下っていく。それが「この谷のくだれる」という部分です。その谷が「くだれるかぎり」というのですから、下っていくその末端部が牧水の目には見えている。上からずうっと視線を走らせていって、尾根の末端まで視線を降ろしてゆく。読んでいる私たちも視線が遠くのような身体感覚を覚えます。そしてその視点の先まで杉の木がずつと並んで立っている。連なっている。とてもスケールの大きな歌で、しかもその大きな風景と同時に作者の視線も遠くまで放たれるような感じがする。こういう歌はなかなかすこいなと思うんです。

それから、これは歌のリズムの問題ですが、牧水の歌のリズムというのは五七調なんです。したがって二句切れが多い。三句切れの歌の場合、下の句は、七・七で十四音でしょう。ところが、二句切れでちよつとワンストップすると、三句目以降に五・七・七の十九音、ゆつたりと言葉を連ねられる空間ができる。それを牧水はとてもし上手に使うんです。そのゆつたりとした調べがゆつたりとした情感につながっている。この歌も「この谷のくだれるかぎり杉ならび立てり」と三句以降の調べがゆつたりしているでしょう。おまけに、牧水は結句を「杉ならび立てり」と八音にする。

三句目以降が五・七・八と二十音になる。このゆつたりとしたリズム感というか空間のつくり方がとてもいい。それが自然を目でなぞるゆつたりとした動きにつながっていく、そこが牧水の魅力だなと思います。

落葉焚かひけむりのかげにほの見えて垣根
に赤あかき寒かん薔ば薇わいの花 『くろ土』

この歌も第二句で一呼吸おきたいと思っています。「落葉焚かひけむりのかげに」、落葉を焚かひいている、あたりに煙がただよっている。その煙がちよつと薄くなつたんでしよう。視界がすつと開けて、向こう側がほの見えてくる。そこに何があつたか。垣根に冬の真つ赤なバラが咲いていた。鮮やかでしょう。まず煙があつて視界が遮られている。その煙がだんだん希釈されていって、向こうのほうに垣根の緑と寒薔薇の赤が見えはじめる。この歌を読むと、読者である僕自身も視界が切り開かれていくような感じでこの世界に入ってゆける。視界がだんだんだんだん開かれていく、その時間の流れみたいなものを感じるんですね。この二首でもわかるように『くろ土』の歌は、時間のスパンを長くとって動きを描きだす。動画の感じがするんです。そして、その動画の感じというのがすごくいい。僕たちの



第13歌集『くろ土』

視覚の動きといふのかな、視覚の運動性といふのかな、視覚の運動性の時間の長さみたいなもの。そういったものがゆったりとした歌の文体の中で、しっかりと立ち上ってくる。それが『くろ土』の叙景歌の魅力です。

真ひがしになびきさだまれる浅間山のけ
ぶりのすゑの雪のむら山 『くろ土』

この歌もそうですね。浅間山が噴煙を上げていたんでしょね。その噴煙がいろいろな方向に流れていた。しかし、だんだん西風が強くなって風向きが定まってくる。すると浅間山の煙が東のほうに流れ続けるようになった。「真ひがしになびきさだまれる浅間山のけ

ぶり」という表現はそういう状態を表わしています。その噴煙の末端部分、しつぽのほうへ目を向けていく。すると、そこに雪をかぶった群馬県のたくさんの山々が見える。この歌はそんな情景を描いている訳です。

この歌では時間の流れが二つに分けて描かれています。一つは煙が東のほうに確実に流れるようになった、という長い時間の描写。二つめは、その煙を目

で追っていつて煙の一番尻尾のほうに雪をかぶった山々が見えた、という短い時間の描写。私たちが自然を眺めているときの長短二つの時間、そういったものが一首の中にきちんと描かれています。この一首を読むときも、僕たちも自然の流れに伴う時間や視点の動きを感じ取ることができると思うんです。そして、そういうゆったりとした時間や視点の移動を保証しているのが文体だと思っんですね。この歌も三十一音よりちょっと長いでしょう。上句は、五・八・六で十九音。このゆったりとした文体がゆったりとした時間の描写を根底で支えています。次の歌もゆったりしていません。

しみじみとけふ降る雨はきさらぎの春の
はじめの雨にあらずや 『くろ土』

この歌なんか、実に、何も言っていないでしょう。雨が降りました。これは二月の初めに降る雨だろうか。それだけなんだけど、そんな単純な内容をこれだけゆったりとした言葉遣いでつないでいる。そこがいいと思います。これなんかも二句切れの文体が効いています。「しみじみとけふ降る雨は」、ここで一息入れて息を吸う。そして三句目以降の「きさらぎの春のはじめの雨にあらずや」というフレーズを繰り返してくる。二月の雨って雰囲気がありますね。冷たい時雨じゃなくてちょっと細かい雨。霧雨のような、あつたかい雨が降り出すと、ああ春だなあと感じます。早春だなあとというしみじみした感じになります。その雨を見て、牧水は、そういうえば今日から二月だなあ、如月だなあ、如月の雨なんだ、と思うんですね。

この歌、第三句と第四句、「きさらぎの春のはじめの」と同じようなことを二回言っています。きさらぎは春の初めですから、二回も同じようなことを言わなくてもいいようなものなんだけれど、こもなかなか味わいがある。あ、二月か、きさらぎの雨なんだ、きさ

らぎというのはもう春の初めなんだ、そんな風思った心の流れのようなものがこの表現で出てきます。「きさらぎの雨は」と一回心の中で思い浮かべて、さらにその後で「きさらぎ」を待ち望んだ「春のはじめ」なのだを再認識する。同じことを二回詠んでいるのではなくて、そこに幽かな認識の変化がある。その表現が巧みです。

檜の実の落ちて沈める淵の底に青き影帯
び小魚あそべり 『くろ土』

澄んだ川の川底が見える。秋の終わり、檜の実が落ちていてそれが見える。まず作者は「川底に檜の実が落ちているな」と発見するんですね。その檜の実の上を何かの影がすうすうと通る。このような情景の歌を僕なんかは歌うと「魚の影はやく過ぎ去りにけり」とかにしてしまう。はじめからその影が魚の影であることを知っていたかのように歌ってしまう。

でも、本当は違う。川底の檜の実を見ている。そこにすうと何かの影が通る。私たちはその影を「魚の影」とははじめから認識している訳ではない。瞬間的には「何か」の影、と感じるはず。そして、あの影は何だろうかとちよつと向こう見る。魚がいる。ああ、

そうか、さっきの影は魚の影だったんだ。多分僕たちが外の世界を認識するとき、そんな認識のプロセスを経ていきます。牧水は、私たちのそんな認識のプロセスを正確にトレースしている。この歌もまず「檜の実の落ちて沈める淵の底に何かの青い影が通り過ぎたよ」と詠う。そしてその影が魚の影なんだ、と後から認識する。そんな感じがよく出ています。それが牧水の歌の魅力だと思えます。

飛沫よりさらに身かろくとびかひて鶴鶴
はあそぶ朝の溪間に 『くろ土』

この歌もいい歌ですね。石にぶち当たって水しぶきがあちこちに飛び散る。

その水しぶきとともに、そのなかから、白いものがぴゅつと飛ぶ。牧水はそれに目をやる。そして、それがセキレイであることに気づく。しぶきよりも遙かに遠く、身軽な感じでセキレイが飛んだ。そんな感じを捉えたのが「飛沫よりさらに身かろくとびかひて」という表現なのです。やはりこの歌も前に見た歌同様、僕らの視線の動きみたいなものを遠く導いてくれる感じが

がします。

このように牧水の叙景歌は『くろ土』で一応の完成を見せます。そして、その後の歌集で、叙景歌が深化させられていく。次の歌は、『くろ土』の後に出た『山桜の歌』という歌集の中に入っている一首です。

麦畑のひとつと風が吹きたてば夕日は
乱るその穂より穂に 『山桜の歌』

麦秋のころ、麦畑が一面、金色に輝きます。そこへ初夏の風が吹く。そうするとすうと波ができるでしょう。あれを詠っているわけですね。手前の穂がすうと揺れる。そうする



第14歌集『山桜の歌』



第15歌集『黒松』

とその穂の振動がその横の穂に伝わる。さらに、その振動が並んでいた横の穂に繋がってゆく。そういう風が揺らす眼前の麦の穂の動きを見つめ、その光に目をやる。それが「夕日は乱るその穂より穂に」という下句の情景なのです。この歌も、僕らの視線を遠くへ導いてくれる歌ですね。

もう一首、見てみましょう。遺歌集『黒松』に収録されている歌です。

水底に魚を泳げるありとしもわかぬかす
けき影ひきながら

『黒松』

先ほどの「檉の実の」の歌と同じく水底に魚の影が透いている情景を描いた歌です。この歌も二句切れの歌ですが、特に三句目以降の「ありとしもわかぬかすけき影」という部分、すごく長くありませんか。字数を数えると十二音ぐらい使って「影」を「ありとしもわかぬかすけき影」と形容しています。考えてみれば、これ、非常に非効率な言葉の使い方なんです。意味的に言えば「うすい影」でいいじゃないですか。すると三文字で済みますから、あと九音分、魚の姿とか、魚がえさを探しているとか、魚はかわいいなとか言うことができる訳です。でも、牧水は、それを言わずに、「ありとしもわかぬかすけき影ひきながら」とゆつたりと言葉を運ぶ。このゆつたりした感じが非常にいい。

このように牧水の歌は、言葉の数を減らしてゆつたりと歌われます。そのゆつたりとした歌のリズムが、ゆつたりと私たちの視線や心の動きを再現している。それが牧水の歌の魅力だと思えます。これはどちらかといえば短い瞬間をスナップショットのように切り取る近代短歌、とくにアララギの叙景とは、異

なる方法論だと思えます。牧水の叙景歌は、近代短歌の主流ではないかもしれない。が、それが選り落としてきた可能性を豊かな形で内蔵してる。そんな風に思うのです。そんな選り落とされた可能性に注目しながら、これからは私は牧水を読んでゆきます。ご静聴ありがとうございます。

『筆者プロフィール』 おおつじ たかひろ



昭和三十五年、三重県松坂市生れ。龍谷大学文学部哲学科卒業。同大学院文学研究科（哲学）を修了。昭和六十一年、短歌結社「未来短歌会」に入会、岡井隆に師事。現在、歌誌「未来」編集発行人。

平成十年、歌集『抱擁韻』で第二十四回現代歌人集會賞、平成十五年、歌集『デブス』で第八回寺山修司短歌賞、平成二十八年、歌書『近代短歌の類型』で第三回佐藤佐太郎短歌賞、平成二十九年、歌集『景徳鎮』で第二十九回齋藤茂吉短歌文学賞、令和五年、歌集『樟の窓』で第十五回小野市詩歌文学賞、令和六年、歌集『椽と石垣』で第二十九回若山牧水賞をそれぞれ受賞。その他の歌集に『ルーノ』『夏空彦』『元国』『汀暮抄』、著書に『アララギの脊梁』『短歌のついでにをは』を読む』等がある。令和七年十月五日に開催した第七十二回「沼津牧水祭・短歌大会」の講師。

第三十六回

中学生短歌コンクール



伊藤一彦若山牧水記念文学館館長と受賞者

第三十六回中学生短歌コンクールに、沼津市内全十九校から一三五五首の応募があった。部活動や学校行事を詠んだ作品が多かったが、自分を見つめたり、趣味に没頭したりする「ひとり時間」を題材にしたものや、家族親族を大切に

する視点を持ったものに秀作が多かった。また、無理なルビを振って読者の心を冷めさせてしまう作品が散見されたのが今年の特徴である。中学生の瑞々しい感性を、うまく引き出すような「大人の力」が必要ではなからうか。

以下、特選作品を紹介する。(湯山昌樹)

夜更けて広げた世界に夢灯し本の中なら
何にでもなれる 萬井美月(門池中)

読書に没頭し、登場人物に自らを投影しているのか。夢の大きさは無限である。「広げた世界」に本との豊かな出会いが読み取れる。

別れの日最後だからと触れてみるいつも
と違う祖母の体温 小山田萩(金岡中)

なかなか身近な人の死に触れる機会が少なくなったと言われる。お祖母様の冷たくなった身体に、生命というものを実感している。

静かだな窓から見えるグラウンド体育祭
は過ぎてしまった 長田琴美(市立高中等部)

熱心に準備・練習に取り組んだのだろう。行事そのものを詠んだ歌は多いが、終わった後の寂しさで熱中ぶりを表現したのは珍しい。

細い麵ツルンと喉を通り抜け旨味の海に
心も浮かぶ 田中瑛太(大平中)

ラーメンか素麺か、その読みは読者に任せて、自分の感じたものを表現することに集中した。「旨味の海」はスープを想起させる。

黄昏の光差し込む病床にしほむなと願う朝
顔の花 杉山晴南(大岡中)

朝顔はすぐにしほむもの。しかし「しほむなと願う」ところに、療養中の作者の心細い気持ち

釣り上げたナマズを池に返すとき来年の
夏また会いたいな 野口碧唯(門池中)

キャッチアンドリリースの場面だが、獲物と「お互いに成長してまた会おう」と言い合っているような雰囲気が良い。

キッチンで皿を洗うと忍び寄る背中に乗
つかる猫の肉球 川口真実希(市立高中等部)

猫との築き上げられた信頼関係のようなものが見える。肉球の柔らかさ・温かさまで感じ取れる。家事に参加している状況までさりげなく描いた。

いいですか了承もらい慎重にバーを引く
夏リクライニング 石川真歩(片浜中)

夏の旅は若者を成長させる。見知らぬ人とコミュニケーションをとり、相手を思いやる貴重な体験の瞬間を、鮮やかに切り取った。

窓の外色鮮やかないちちょうの木新学期よ
り大きくなった 大坪莉子(第一中)

「学期」で時期を表すのは、大人にはできないこと。そして、「いちちょう」の成長は、作者自身の成長との合わせ鏡である。

たくさんさんの思いをのせた二分半頭につけ
たりポンが揺れる 石原あかり(金岡中)

ダンスの発表会だろうか。二分半の激しい動きを、リボンの揺れで表現した。すべてを詠んでしまうのではなく、省略された表現が良い。

第三十回若山牧水賞に 山中律雄氏の歌集『光圏』



(宮崎日日新聞社 提供)

第三十回若山牧水賞は山中律雄^{りつめう}氏の第六歌集『光圏』(現代短歌社)に決まった。選考委員は、佐佐木幸綱、高野公彦、栗木京子、伊藤一彦の四氏である。

山中律雄氏は昭和三十三年秋田県生れ。駒澤大学仏教学部卒。昭和五十九年に短歌結社「運河」に入会。にかほ市の禅林寺住職。令和三年に秋田県芸術文化章、同四年第五十回日本歌人クラブ賞、第二十五回島木赤彦文学賞を受賞。現在、短歌結社「運河」代表、秋田県歌人懇話会会長。

受賞した歌集『光圏』は、自らの病と向き合う中で、生の真実を見据え、秋田の自然に重ねて詠む。佐藤佐太郎から続く写生の伝統と馥郁たる口マンをたたえた三三一首を収録している。

受賞について山中氏は若山牧水賞は歌人にとってすくく大きな賞。牧水と自分との歌の距離は遠いと思っていたので、とても驚いたと語った。

選考委員の各氏は以下のように評している。

高野氏は「山中氏は佐藤佐太郎の写実精神を受け継ぎながら、そこから一歩踏み出し独自の世界を広げているのが特徴。写実を超えたユーモアが楽しい。歌の字余りもほとんどなく、定型を重んじる姿勢は牧水とも通じ、豊かな世界が凝縮された優れた歌集」。栗木氏は「受賞歌集は仏教用語を用いているが平明で柔らかく、深い実感を伝える。村の住職として人々と共に生き、死者を覚え続ける姿や、重い病を経た率直な死生観が端的に表れる。写実を極めた表現により、心情の手放し方の美しさが際立つ」。伊藤氏は、「山中さんは東北・北海道在住、また、佐藤佐太郎系歌人として初の牧水賞受賞者。秋田の自然や村の暮らし、住職としての日常、病と向き合う時間を清潔な叙情で詠み、ユーモアや温かみも兼ね備える。従来の牧水賞のイメージを刷新し、人間味あふれている」と語った。

令和八年一月二十九日(木)宮崎観光ホテルで授賞式が行われた。授賞式の後、伊藤一彦氏がコーディネーターを務め、選考委員と第五回受

賞者の小島ゆかり氏、河野俊嗣宮崎県知事が「若山牧水賞の歩みとこれから」をテーマにシンポジウムを行った。翌三十日(金)に日向市中央公民館で山中律雄氏の「牧水が詠み得なかつたこと」と題した記念講演が行われた。

歌集『光圏』から作品を紹介する。

繰り返し石打つ音のかるやかに添水^{そぶづ}は日かな時間とあそぶ
自動車も人も時間に選ばれて交互に青き信
号わたる

盆の経分けて息子と回りをりあと五十軒気
がとほくなる
死の淵に日日過ごしみて釈尊の教へさした
るものと思はず

朝顔の花を数へてゐる妻かわづかに下の顎
うごかして
横向きにストレッチャーに乗せらるるわが
身おもへば寝釈迦に似んか

うちつけに闇のなかよりあらはれて蛾が街
灯^{くもっぴん}の光圏を飛ぶ
風かよふ夏の座敷に寝る妻のすこし上座に
ゐる猫が寝る

ちちははに供へてふつか白桃の紅あはく差
すところより食ふ
村の柿くすねし熊よこの夜の雪をさかひに
まどかに眠れ